

01

岩手県九戸郡
野田村

チーム北リアス

個別の活動を「チーム」にまとめ支援を展開

岩手県北部の沿岸にある野田村は津波で大きな被害を受けた。多くのボランティアが支援に訪れたが、小さな村の役場は混乱状態。そこでつなぎ役を買って出たのが貫牛利一さんだ。個別に活動していた大学や団体を一つのチームとしてゆるやかにまとめ、継続的な支援を展開した。

取組のPOINT

ヒト

故郷への愛着

着眼点

個別のボランティア団体を一つに

連携・協働

活動の尊重と連携

持続性

専門性生かし活動継続

DATA

取組主体

チーム北リアス

取組内容

被災した住民の支援

人物紹介

現地事務所長
貫牛利一 (かんぎゅう としかず)



岩手県九戸郡野田村出身。久慈広域観光協議会専務理事、観光コーディネーター。1992年任意団体「ふるさと野田研究グループ」を立ち上げ、伝統的製法で塩を作り「のだ塩」として商品化した。2011年ボランティア団体をつないで「チーム北リアス」を発足、現地事務所長に就く。

ヒト

故郷への愛着

ふるさと愛と仲間の絆を育てた塩作り

野田村に生まれ育った貫牛利一さんは、20代前半は県外で暮らしたが、長男ということもあり数年で帰郷。一度地元を離れて気づいたことは、故郷について自信を持って他人に語れない自分だった。どこから来たのと聞かれても「八戸の南のほう」や「宮古の北のほう」とあいまいな表現をしていた。Uターンして地元で骨を埋める決心をしたとき「生まれ育った町を誇らしく紹介できる人間になりたい」と思ったという。仕事とは別に、地域づくりの活動をしようと仲間を集め1992年「ふるさと野田研究グループ」を発足させた。

目玉となった活動は、昔ながらの塩作りの復活だ。自然濾過された海水を薪釜で煮詰めたものを「のだ塩」と名付けると、人気の特産品になった。職業や年齢を超えた仲間と交流を深め、地元の魅力を再認識した頃、東日本大震災が発生した。

ボランティアの善意を無駄にたくない

野田村の被害は甚大だった。津波の高さは18メートルにまで達し、村の中心部まで押し寄せた。貫牛さんの自宅は高台にあり被害を免れていた。2011年3月12日の朝、中心部へ足を運ぶとそこは、完全に色を失った世界。仲間と愛着を育んできただけにショックは大きかったが、すぐさまグループ



津波により甚大な被害を受けた野田村



ボランティアによるガレキ撤去の様子

のうち被害の少なかったメンバーとともに復旧作業に取り掛かった。

しばらく経つと村役場には大勢のボランティアが訪れた。しかし小さな村の役場は未曾有の災害に混乱しており、職員が業務をさばききれない状況となっていた。貫牛さんには、せっかくの善意が生かされていないように見えた。

着眼点

個別のボランティア団体を一つに

出会った翌日、チーム結成を決心

役場の災害対策本部は連日、村外から訪れたボランティアであふれた。貫牛さんは、被災地のニーズとボランティアのつなぎ役になれないかと考えていた。また、単発のボランティアも大変ありがたいが、日が経つにつれて継続的な活動が重要に思われ、定期的に通ってくれる団体や個人を探した。そこへ紹介されたのが、大阪大学の渥美公秀（あつみ ともひで）教授だった。災害と防災の専門家で、認定特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワークの理事長を務めており、野田村へも震災後早い時期からたびたび学生とともに足を運んでいた人だ。

2011年5月の初めに二人で会い、その場で意気投合。息の長い支援活動を目指していることや、大阪大学の他に京都大学、関西学院大学、弘前大学、八戸工業大学、八戸高専とのネットワークがあることが分かり、協働して活動にあたることを構想した。翌日には貫牛さんの自宅敷地へ案内し「ここに事務所を建てませんか」と提案までしたという。

仮設住宅での孤立防止と見守り

貫牛さんの自宅敷地内にプレハブを建てて事務所とし、同年6月11日に任意団体「チーム北リアス」を設立した。構成団体は大学・高専の他、NPO法人や社会福祉協議会、青年会議所、任意団体などで、現地事務所所長に貫牛さんが就いた。メンバーは黄緑色の目立つビブスを身につけて活動する決ま

りだ。この頃のニーズはまず避難所から仮設住宅への引っ越し。新しい環境での生活が始まると、炊き出しや茶話会、誕生日会、手作りワークショップなどを企画した。1軒ずつ回って声をかけたりチラシを配ったりして、住人が孤立しない環境づくりに努めた。

「野田村の人は大学生なんてほとんど会ったことがないし、緊張します」と貫牛さん。支援者と住人の交流の場を持ち、ニーズを把握したいが、正面切ってインタビューしてもなかなか本音は引き出せない。そこで「お茶飲みしましょう」と誘い、距離を縮めることから始めた。貫牛さんは学生に「メモを取るなよ」と伝えたという。目の前で記録されたとたんに、住人は緊張して話さなくなるからだ。頭に入れ、事務所に戻ったらすぐ書き起こし、チーム内で共有する仕組みを作った。生活上の不便や仮設住宅の不具合、ゴミ出しや騒音の問題など、チームで対応できることはして、行政に伝えるべきことは伝える。引きこもったままであるなど、気がかりな住人の情報も共有し、専門機関につないだ。夏は熱中症を心配し、こまめに戸別訪問をして様子を聞いた。





「写真返却お茶会」を開いた時の様子

連携・協働

活動の尊重と連携

「今日も来てくれている」という安心感

個々に活動していた大学や団体を一つにまとめようとしたのはなぜか。「村民にとって、一つのチームがいつもいることが安心感につながると思いました」と貫牛さん。名前も知らなくても黄緑色のビブスを見れば、チームの人だと分かる。昨日も見た、今日もいる、ずっと助けてくれるという安心感は、被災地にとって重要だ。「今までの暮らしが奪われ、一人では立ち上がれない状況の中、外部の力を借りるときの手法としては良かったのではないかな」。

個々の団体には得意分野があり、例えば写真を洗って持ち主に返す、温かい食べ物を作って振る舞うなど、活動内容は自由。規約も作っていない。決めごとは「互いに批判しない」「目的は野田村のため。自分たちの活動成果を押し付けないこと」とした。

自治体への助言

2012年4月頃からは自治体も復興の方向性を議論し始めた。チーム北リアスは、一年間住民に寄り添って感情やニーズを吸い上げてきた実績から、毎月会議に呼ばれ助言を求められた。

またこの頃から、食事や物資の完全無償提供をやめ、10円程度のわずかな額を設定することを心掛けた。被災した人たちにとって、ただ無条件にもらうだけでなく「自分で選び、料金を払う」ことが大切なフェーズに入ったと考えたからだ。集まった金額は社協などに寄付し復興に役立ててもらった。被災直後は物心両面で全面的に支援し、元気づけることが最も重要だったが、自立を見据え、被災者の自発的な行動に寄り添い伴走する支援へとシフトする必要がある。

持続性 専門性生かし活動継続

心の復興支えるセミナー

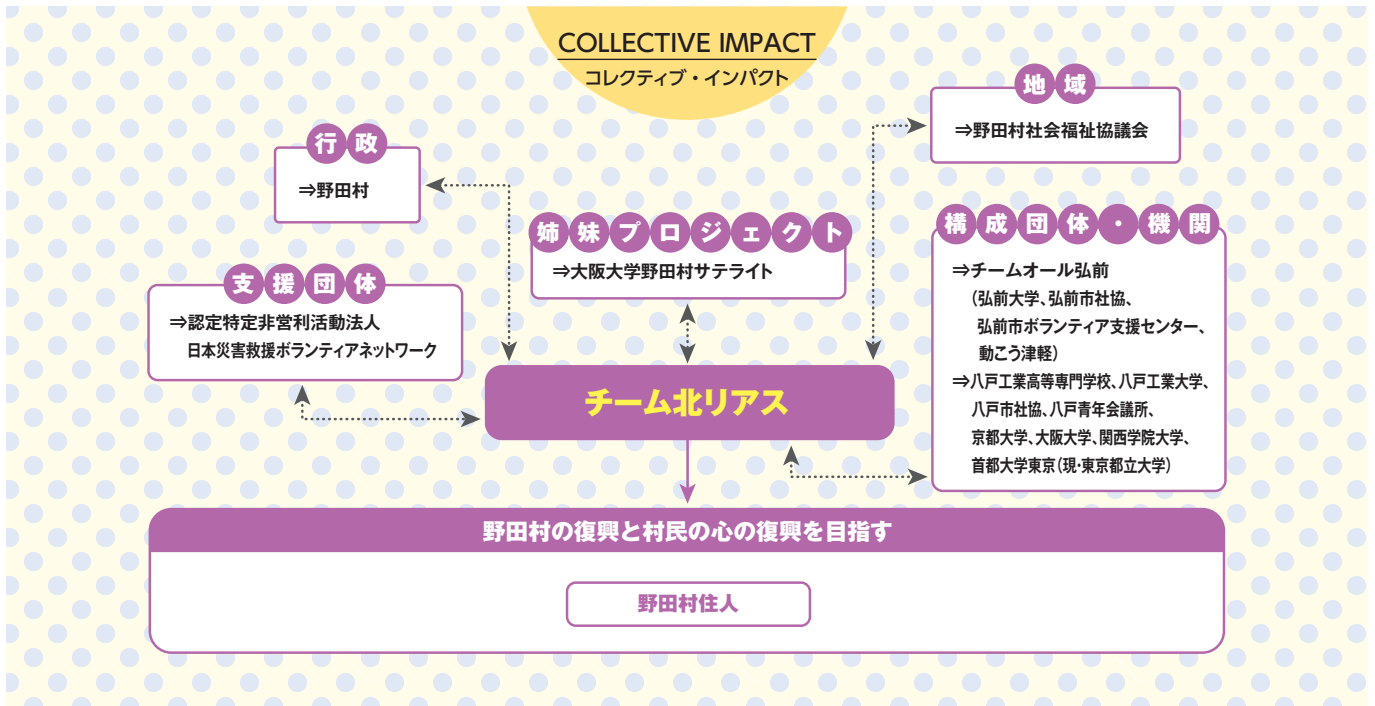
2013年、事務局に隣接して大阪大学が「大阪大野田村サテライト」を設立。以降5年60回にわたって「野田村サテライトセミナー」を開いた。村民の生活再建と心の復興が目的で、題材は防災や災害の知識、海外の津波被災地の復興事例、栄養学、社会科学など。時には地元の漁師が漁について“授業”を行うことも。主に仮設住人が参加し「生涯でこんな勉強をしたり話を聞いたりできると思わなかった」と感激したという。事業終了後、2階建てのプレハブはチーム北リアスに無償譲渡され、現在は野田村交流センターとして機能している。



黄緑色の揃いのビブスを身に付けたメンバー



仮設住宅でバーベキューをした時の様子



拠点としてそれぞれの活動をつなぐ

現在は、以前のように毎日支援活動を繰り返すことは無い。しかし事務所に貫牛さんが常駐することで全国にいるメンバーがつながり、チームとしての活動を継続できる。徐々に仮設から復興住宅への移転が進む中、夏まつりや盆踊りの復活の動きも盛んだ。弘前大学は毎年夏休みに泊まりがけで訪れ、野田村の小学生と交流勉強会を開く。コロナ禍の2020年は、オンラインで夏祭りや勉強会を開いた。卒論の題材に野田村を選び、2～3週間泊まり込んで住人と交流する学生も少なくない。

学生時代にチームで活動していた人が、卒業後に研究者として野田村で一年間暮らした例もある。彼は毎週、リヤカーに本をたくさん積んで中心部の公園に現れ、コーヒーを振る舞って「新書カフェ」を開いた。住人にも喜ばれ、彼が村を離れた後は、役場が引き継いで同様の会を開いているという。

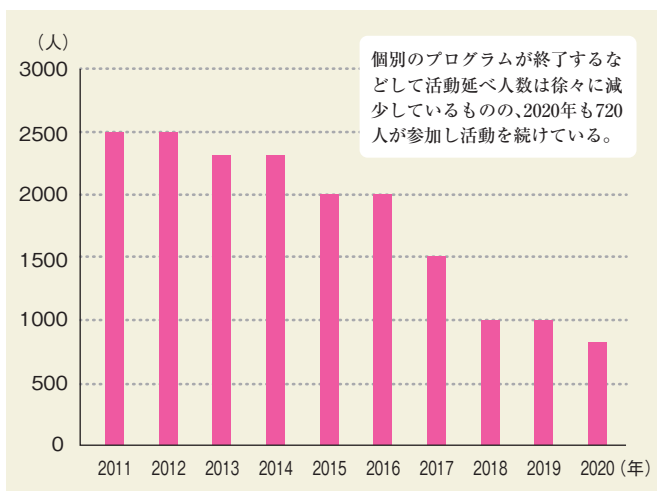
貫牛さんの自宅敷地には、チーム北リアスのメンバーと一緒に植樹した桜の木が70本あり、「この木がメンバーと野田村をつないでくれる」と話す。

顕彰を受けたことは光栄だが、受賞や「震災から10年」が区切りにはならない。「今の暮らしが幸せだ、と一人ひとりが思えることが復興。それが叶うまでチームの活動は続きます」。



植樹され美しい花を咲かせた桜の木

■「チーム北リアス」の活動各年延べ人数



本事業例の問い合わせ先

チーム北リアス

岩手県九戸郡野田村野田22-114-49
E-mail : kangyu@kuji-tourism.jp
HP : <http://northrias.grupo.jp>

岩手県北リアス地域の長期的なサポートを行うために、八戸、弘前、関西の有志が立ち上げたネットワーク。団体・個人が情報を共有しながら様々な活動を展開している。